

**選定理由** 現存産地が県内に1箇所しかなく、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は Lamarck (1811: 316–317, no. 24) で、二語名法適用前の M., S. & A. Lister (1770: pl. 20, fig. 731) と Martini (1773: 171–173 (part), pl. 48, figs 515–516) の図示個体に対して命名された。その後 Tryon (1883 in 1882–1883: 78, pl. 22, figs 6–14, as *Oliva mustellina* [sic]) は、*O. Caroliniana* Duclos, 1835: no. 105, pl. 19, figs 5–8 や *O. jayana* Ducros de St-Germain, 1857: 68–69, no. 44, pl. 3 (“2” in the text), fig. 44a–b, 及び Marrat (1870–1871: 1–46, pls 328<sup>bis</sup>–351) が記載した *O. angustata*, *O. arctata*, *O. cana*, *O. grata*, *O. laevis*, *O. neostina* (not of Duclos, 1835), *O. pacifica*, *O. scitula* を全て本種の異名またはその可能性があったとしたが、それらの原記載の図を見る限りいずれも本種と同種とは思われない。一方、近年新種記載された *O. virgata* Sterba, 2005: 74–77, figs 1, 3A は明確に識別できないため本種の新参異名とみなす。殻長約 30 mm, 殻径約 14 mm, 円筒形で厚質堅固。螺塔が低平な一方で体層が極端に大きく殻長の9割を占める。縫合の後方に1本の深い螺溝を巡らす。殻表は平滑で光沢が強く、クリーム色の地を黒褐色のジグザグ模様が密に覆う。殻口は狭くて前後に細長く、内部は莖色。外唇は直線的で厚く、前端は彎入する。内唇から軸唇にかけて白色の光沢ある滑層が発達し、軸唇は前方に向けて広がり、多数の強い襞を斜めに並べる。縞帯は幅広く明らか。蓋はない。軟体の頭部-腹足は灰色の地に多数の顕著な白斑を散らす。足は頭部の真下にある深い溝で前足と後足に分かれ、前足は左右に広がる短い三角形、後足は匍匐時に著しく大きく広がり、全体の輪廓は円形で、左右両側面が上方へ反り返って殻を覆う。頭触角は短く、水管は細い筒状で長さは中庸 (木村昭, 2012: 73, text-figs や高重, 2019: 231, text-figs に生体写真)。歯舌を波部 (1943: 71, no. 10, pl. 3, fig. 6) が図示している。

写真： [瀬戸内市] 牛窓町筵江浜, S8 [=1933].6.28., 畠田和一コレクション #1062, 福田撮影。殻長 32.7 mm, 殻径 15.6 mm。



**分布** タイプ産地は「... probablement l'Océan américain」(多分アメリカの海) であるがこれは誤りである。異名である *Oliva virgata* は「off Kuantan, Malaysia (Sunda-Schelf im Südchinesischen Meer)」(マレーシア, パハン州のクアンタン沖 (南シナ海 スンダ海棚)) から記載された。これまで大半の文献が「房総半島以南」に分布するとしているが、実際には青森県八戸での記録がある (鳥羽, 1915: 14)。これは本種の産地としては極めて異例で、鳥羽自身が「遠く八戸迄北進し居るは、意外の事に屬す」と述べている。日本海側は男鹿半島以南、九州まで知られ (西村正・渡部景, 1943: 68, no. 131), また宮城～茨城県の間で報告例がないことから、八戸での産出は津軽海峡を経て日本海から太平洋に流入する対馬暖流末端の影響化に生じたと推測される。沖縄からも記録はあるが (岡田他, 1959: 170, no. 765; 村岡・内藤, 1991: 83, no. 0764), 実際に産するか否かは定かでない。国外は朝鮮半島, 中国 (黄海南部～海南島), 台湾, ベトナム, タイ, マレーシア, シンガポール, インドネシア, フィリピンまで分布する (Reeve, 1850c: sp. 23, pl. 13, fig. 23; Ducros de St-Germain, 1857: 57, no. 32, as *O. mustellina* [sic]; Lischke, 1869: 69; 1871: 61; Weinkauff in Küster & Weinkauff, 1878: 92–93, no. 63, pl. 24, figs 10–11; Springsteen & Leobrera, 1986: 187, pl. 51, fig. 6, as *O. mustellina* [sic]; 權他, 1993: 90, 313, fig. 44-3; Swennen *et al.*, 2001: 132, fig. 450, as *O. mustellina* [sic]; Hylleberg & Kilburn, 2003: 92–93; 関他, 2004: 253, fig. 695, as *O. (Musteloliva) mustelina mustelina*; Li & Ma, 2004: 101, pl. 060, fig. E; Dharma, 2005: 148, pl. 49, fig. 7a–b; 張, 2008: 220, text-fig.; 張他, 2012: 108, no. 93, text-figs; 楊他, 2013: 106, 107, fig. 385; 鄭他, 2013: 261, text-figs; 王他, 2016: 60, no. 169, text-figs)。

**生息状況** 砂質干潟の低潮帯から潮下帯に産し、かつてはごく普通種であった。瀬戸内海でも1970年代前半頃までは大潮の干潮時に干潟表層を多数の生貝が匍匐する様子が観察できた。近年も外洋に面した海岸の潮下帯には個体群が残存するものの、内湾域では激減し、特に潮間帯でほぼ壊滅的である (木村昭, 2012)。フデガイの項で述べたのと同様に本種も賊腹足類の一員であるため、今のところ明確な報告は見当たらないものの有機スズがもたらしたインボセックスによって急減した可能性が論じられている。香川県では近年の調査で「新鮮な死殻は全く採集されなかった」とされ、その惨状を視覚的に訴えるごとく、殻表が激しく摩滅してチョーク状に白化し尽くした見るも無残な死殻があえて図示されている (瀬尾・Tanangonan, 2014: 100, no. 152, pl. 2, fig. 12)。岡山県では大垣内 (1968a: 46) が倉敷市塩生のサンドポンプで採集したことを報告し、岡大玉野臨海 (1978: 161) のリストにも和名が登載され、その当時はまだ本種の減少傾向に注意が払われていなかったと思われる。畠田和一コレクション中にも「[瀬戸内市] 牛窓町筵江浜」(「採集日 S8 [=1933].6.28」, 4個体, #1062; 写真) と「[浅口市] 寄島」(「[昭和] 31 [=1956].11.21. 採集品」, 1個体, #1779) の標本が含まれており、特に筵江浜産個体は光沢も色彩もよく保存され、肉抜きしきれなかった肉片が殻口から出てくるため採集時は生貝であったと考えられる。しかし近年は生貝はおろか新鮮な死殻すらも全く見出されなくなり、殻表が擦れて赤褐色の下層が露出した古い殻がたまに転がっている程度である (OKCAB M1791, M9328)。2018年には笠岡市の漁港に揚げられた漁屑中から、殻頂が飛んで大きく円い穴がぽっかり開き、色彩を一切欠く殻だけが得られた (M28936)。本種はフデガイなど潮下帯に棲息環境の中心がある種と異なり潮間帯にも多産する種であるため、本来なら少なくとも新鮮な殻が浜に打ち上げられるはずである。それが全く見られないばかりか潮下帯においても極端に古い殻しか見られないのは、絶滅に近い状態にあることを示すと捉えざるを得ない。香川県でも同様の状況であることから、もはや瀬戸内海中央部に本種は生存していない可能性が考えられていたが、2023年6月、国土交通省中国地方整備局の調査によって倉敷市味野湾の水深 24.2 m シルト底から生きた幼貝 1個体が発見された (M31160)。しかしこの個体は殻長 10 mm に満たない微小な幼貝で、兵庫県や広島県などから例外的にたどり着いた幼生が多少成長しただけの、偶存個体であった可能性が否定できない。今後複数の生きた成貝が見出されない限り、岡山県内に安定した個体群が存在するとは見做しがたいため、現時点では依然としてほぼ絶滅同然の状態にある。

(福田 宏)